埼玉大学紀要　教育学部（教育科学Ⅲ）第46巻第1号（1997）91～107頁

柔道の国際化と日本柔道の今後の課題（第一報）
―アトランタオリンピック女子柔道競技の競技内容と問題点を中心に―

野瀬　清喜*

Ⅰ　緒言

1996年7月19日に開幕した第26回アトランタオリンピック大会は、197の国と地域からの約15,000名の選手、役員が参加して盛大に開催され、8月4日に閉幕した。大会期間中にオリンピック公園・TWA航空機の爆破などの不幸な事件があったが、人種差別や国際紛争によるボイコットもなく、世界中の優秀なアスリートが一堂に会して盛大に競技が行われた。今大会は、近代オリンピック100周年を記念する大会でもあったが、クーベルタン男爵が「ドイツに戦争で破れた母国フランスを救うのは、銃と剣ではない。混迷するフランス教育界に活を入れることだ」「情操の完全な発育のためには健全な肉体が必要である」[1]との発想から古代オリンピックを近代スポーツの祭典として昇華させ開催させたのがその起源である。また、男爵は「スポーツという自由貿易がヨーロッパに実現する日には、平和が大きく前進する」[2]とも提言している。その後、近代オリンピックは、第二次世界大戦、東西陣営の緊張、アパルトヘイト政策、人種差別問題、中東情勢、アフガニスタン侵攻など幾多の政治的試練を経るが、前回のバルセロナ大会、今大会と平和の祭典としての役割を果たし、男爵の夢は、着実に実現に向かっている言えるであろう。ところで今大会に参加した日本選手団総勢499名（内、役員189 名）の成績は、金メダル3個、銀6個、銅5個と日本オリンピック委員会（JOC）やマスコミの予想を大きく下回る結果であった。この最も大きな原因は「世界各国の競技水準が高まったため世界レベルの競技力、記録を持っていても試合当日の状況次第でメダルも獲得できない」[3]という実情が上げられる。また、日本選手の体力不足、精神面での弱さ、経験不足は、40年以上前から指摘を受け続けてきた内容[4]であるが、今大会で改善の方向に向かったという報告は見られない。このような状況下で、日本柔道選手（男女14名）は、金メダル3個、銀4個、銅1個、合計8個のメダルを獲得し、日本のメダル数の半数以上を確保している。しかし、柔道競技に於いても日本、韓国、フランス、ドイツ、ロシア、イギリスなどの長い伝統と多くの競技人口を有する国が、大量のメダルを量産する時代は終わったと考える。中国、キューバ、イスラエル、トルコ、ブラジル、アルゼンチンなど様々な大陸の国々から優れた競技者が排出し、世界と伍して戦う時代を迎えたと言えるであろう。先にも述べたように、このような傾向は、柔道競技に限ったことではない。サッカー競技でアフリカに初優勝をもたらしたナイジェリアを例にとるように各大陸の競技水準の向上は目を見張るばかりである。また、柔道は学習指導要領で、武道として位置づけられ「我が国固有の文化として伝統的な行動の仕方が重視される運動」「礼儀作法を尊重して練習できることを重視する運動」「伝統的な考え方を理解し、それに基づく行動の仕方を身に付ける」[5]などのねらいがあげられている。はたして、日本代表の柔道選手が、競技者としてこのことを実践しているか疑問な部分もある。

このような観点より、本研究では、柔道競技における各国の強化のシステムと運営・強化のため

*　埼玉大学教育学部保健体育講座

の施設・医科学サポートのシステム・大会の開催と運営・選手を取り巻く環境・コーチの育成法・選手、コーチの競技に対する価値観・選手の身体特性・国際柔道審判規定の問題点・柔道着等のスポーツコードの問題などを取り上げ、継続的に柔道の国際化と競技力向上の問題点を取り上げていきたい。今回は、その第一報としアトランタオリンピック女子柔道競技を中心に、強豪国のメダル獲得数・日本代表の身体特性・国際柔道審判規定とスポーツコード・競技内容の分析・各国の柔道のスタイル・ナショナルトレーニングセンターなどの問題を取り上げた。また、第一報、第二報では、強化の現状から問題点を探り、第三報以降は、それぞれの問題点を詳細に検討し、今後の日本柔道が競技力向上を図るための課題を見つけ出していきたい。

Ⅱ 方 法

1 調査項目

（1）女子柔道強豪国のメダル獲得数
（2）日本女子柔道選手の身体的特性
（3）国際柔道審判規定とスポーツコード
（4）オリンピック・世界大会の競技内容
（5）欧州勢の組み方の変化と新しい技
（6）ナショナルトレーニングセンター

以上の6項目を今回の調査対象とし、それぞれ収集した資料を分析し検討を加えた。

2 調査内容

（1）女子柔道強豪国のメダル獲得数

1989年度、1991年度、1993年度、1995年度の世界選手権大会及び1992年度、1996年度のオリンピックに於ける女子柔道のメダル獲得国を調査し、メダル獲得数から国際強化の推移と各国の問題点を考察した。

（2）日本女子柔道選手の身体的特性

全日本柔道連盟科学研究部が行った全日本女子強化選手の体力測定資料及び全日本女子柔道体重別大会の14年間のプログラムを基に選手の追跡調査を行い、女子柔道選手の年齢、身長、体力診断テストなどの比較から身体的特性を検討した。

（3）国際柔道審判規定とスポーツコード

オリンピックの審判は、国際柔道連盟試合審判規定を用いて行う。今大会の審判団は、技の評価が非常に甘く、国際規定の運用の問題が多く指摘された。[6]また、柔道着の前合わせの問題[7]、帯の締め方[8]、畳の材質[9]も議論を呼んだ。これらのことより、国際柔道審判規定の問題点を調査し、その運用とスポーツコード関わりについての検討を行った。

（4）オリンピック・世界大会の競技内容

これまで開催されたオリンピック柔道競技、世界柔道選手権大会から資料が抽出できる1981年度・1983年度・1989年度の世界大会及び1992年度・1996年度のオリンピックを対象に、技の使用頻度、決まり技、一本勝ちの割合、反則ポイントなどの項目を比較し、競技内容の変化を考察した。

（5）欧州勢の組み方の変化と新しい技

欧州を中心に新しい技が開発され、投げ技、固め技に大きな変化が見られるとの指摘が多くなされている。[10]これらの代表的な技と技を施す選手の組み方、姿勢の変化を1996年度欧州柔道選手権大会・1996年度オリンピック柔道競技のVTR、写真から抜き出し考察を加えた。

（6）ナショナルトレーニングセンター

今回のオリンピックの不振の原因の一つに、スポーツの強豪国が全て有している国立のスポーツトレーニング施設が、日本に設置されていないことが上げられた。（朝日新聞・9月12日）この施設建設については、来年度の概算要求に調査費がついた段階である。この項目では、オランダ・アーヘン市のパーペンダル国立トレーニングセンターを中心にフランス・パリ市の国立スポーツ研究所（ＩＮＳＥＰ）、アメリカ・コロラドスプリングス市のＵＳトレーニングセンター、韓国・テヌンの選手村などを紹介することとした。

Ⅲ 結果と考察

1 女子柔道強豪国のメダル獲得数

現在、国際柔道連盟には、177 の国と地域が加盟しており、中東の限られた国を除く全ての国で

女子柔道が行われている。柔道が女性に門戸を開いたのは、1893年（明治26年）である。しかし、柔道の創設者である嘉納治五郎は「勝負になると勝ちたい、負けたくないの一心から、とかく無理をするようになる」などの理由から「当分の間、試合は禁止する」[11]という方針で女子柔道は、形と無理のない乱取で、普及、発展していった。柔道の試合が、女性に開放されたのは、諸外国からで1956年オーストラリア、1963年イタリア・ドイツ、1970年イギリスなどで大会が開催された。[12]このような経緯から1972年、国際柔道連盟は、総会において「将来、女子の世界選手権大会を開催する」ことを決定した。一方、日本は女子柔道の競技化に消極的であったため対応が遅れ、1978年7月にようやく第1回全日本女子柔道選手権大会が講道館で開催されている。この10年近い競技化の遅れは、その後の日本女子柔道にとって大きなハンディとなった。以上のような経過から女子柔道の強豪国は、第1回世界女子柔道選手権（1980）が開催された1980年代は、オーストラリア、イタリア、ドイツ、イギリスなどに加えフランス、アメリカが常に多くのメダルを獲得し中心勢力となっていた。しかし、1988年のソウルオリンピックで女子柔道が公開競技として採用され、次回バルセロナ大会から正式競技となることが決定されると状況は一変し、世界の各国が本格的に強化に乗り出すこととなる。

表1から表6は、女子柔道が、世界のスポーツとして認められ、欧米以外の各国も本格的に強化を開始した1989年第6回世界女子柔道選手権（ベオグラード）から1996年のアトランタオリンピックまでの6大会のメダル獲得国を大会別に表したものである。1989年第6回世界選手権（表1）は、イギリス、フランス、イタリアなどの古豪が上位を占めた最後の大会である。しかし、第1回から第5回大会まで複数のメダルを取ることが多かったアメリカ、オーストラリアが姿を消し、それに変わってキューバ、旧ソ連、スペインなどが初のメダルを獲得している。また、アジア勢の中国、日本が安定した力をつけ、それまでの5大会で1個のメダルしか取れなかった韓国が複数のメダルを獲得している。2年後の1991年第7回世界選手では、韓国がトップに躍進し2個の金メダルを獲得している。韓国では、1988年のソウルオリンピックが開催され、その準備のためソウル郊外のテヌンに広大な敷地を有するトレーニングセンター・選手の宿泊施設が完備され国内の強化体制が整った。しかし、女子柔道では、日本より強化が立ち遅れたためソウル大会では成果が現れなかった。金メダルを獲得した2選手は、いずれもソウル大会の代表でもあり、この時期に至ってようやく強化の成果が現れてきたと言えよう。また、スペインが、初の金メダルを獲得しており、地元開催のバルセロナ五輪に向けての強化が着実に進んでいることが伺える。その他の強豪国は、安定してメダルを獲得しているが、第1回から金メダルを取り続けたイギリスが初めて優勝を逃し、イスラエルが初のメダル獲得に成功するなど徐々に強豪国の変化が見られる。1992年の第25回バルセロナオリンピック（表3）は、女子柔道が初のオリンピック正式競技となった大会である。フランスと開催国のスペインが上位を占めたが、その他の上位国は、後発のキューバ、中国、韓国、日本である。これらの国が上位を占めたためイギリス、イタリ

表1　世界選手権（ベオグラード・1989）

順位	国名	1位	2位	3位	合計
1	イギリス	2	2		4
2	フランス	2		4	6
3	イタリア	1	1		2
4	中国	1		2	3
4	キューバ	1		2	3
6	ベルギー	1			1
7	日本		3	2	5
8	ドイツ		1	1	2
9	旧ソ連		1		1
10	韓国			2	2
11	オランダ			1	1
11	ポーランド			1	1
11	スペイン			1	1

表2　世界選手権（バルセロナ・1991）

順位	国名	1位	2位	3位	合計
1	韓国	2			2
1	イタリア	2			2
3	中国	1	1	1	3
4	フランス	1		3	4
5	ドイツ	1		1	2
6	スペイン	1			1
7	イギリス		3	2	5
8	キューバ		2	2	4
9	日本		1	3	4
10	ベルギー		1		1
11	オランダ			2	2
12	イスラエル			1	1
12	ポーランド			1	1

表3　バルセロナオリンピック（1992）

順位	国名	1位	2位	3位	合計
1	フランス	2		2	4
2	スペイン	2			2
3	キューバ	1	1	2	4
4	中国	1		2	3
5	韓国	1			1
6	日本		3	2	5
7	イギリス		1	2	3
8	イスラエル		1		1
8	イタリア		1		1
10	トルコ			1	1
10	ロシア			1	1
10	オランダ			1	1
10	ベルギー			1	1

アのメダル数は減少しトルコが初のメダルを獲得している。また、ドイツは、東西ドイツ統合の混乱のためか全く元気がなく女子では、初のメダルなしの大会となった。ドイツのように強豪選手を多く抱えていてる国でも、国内の情勢次第で大きく成績が下がるほど世界のレベルが上がってきたと言えよう。1993年第8回世界選手権（表4）

表4　世界選手権（ハミルトン・1993）

順位	国名	1位	2位	3位	合計
1	日本	1	2	1	4
2	中国	1	1	2	4
2	イギリス	1	1	2	4
4	キューバ	1		3	4
5	韓国	1		2	3
6	ベルギー	1			1
6	ドイツ	1			1
6	ポーランド	1			1
9	オランダ		1	2	3
10	アメリカ		1		1
10	イスラエル		1		1
10	スペイン		1		1
13	ロシア			2	2
14	イタリア			1	1
14	フランス			1	1

は、日本が10年ぶりで金メダルを獲得し、初めて世界のトップに立った大会である。この大会では、上位5ケ国に中国、韓国を含めアジアから3ケ国、それに中米のキューバが入り、それまで女子柔道をリードしてきた欧州以外の国が上位を占めた。また、前回大会で他を引き離してメダル獲得数1位であったフランスが、銅メダル1個と不振であった。メダル獲得国に大きな変化はないものの順位が激しく入れ替わり、大会へ向けての仕上がり次第でメダル数が大きく変わる時代を迎えつつあると言える。1995年第9回世界選手権（表5）は、37年ぶりで日本で開催された大会である。地元開催である日本は、緊張のためか勢いを失い2個の

表5　世界選手権（東京・1995）

順位	国名	1位	2位	3位	合計
1	キューバ	2	1	4	7
2	韓国	2	1	2	5
3	オランダ	2	1		3
4	フランス	1		1	2
4	日本	1		1	2
6	中国		3		3
7	ベルギー		1	1	2
8	アルゼンチン		1		1
9	ポーランド			3	3
10	ウクライナ			1	1
10	アメリカ			1	1
10	イギリス			1	1
10	ブラジル			1	1

メダルに終わっている。一方、強豪として上位に定着したキューバ、韓国にオランダ、フランスなどの施設、強化体制の整った国が上位に進出している。また、旧ソ連から独立したウクライナ、南米のアルゼンチン、ブラジルが、初のメダルを獲得するなど女子柔道の国際化はますます広がりを見せている。1996年7月に開催されたアトランタオリンピックのメダル獲得国は、表6の通りである。

表6　アトランタオリンピック（1996）

順位	国名	1位	2位	3位	合計
1	日本	1	2	1	4
1	韓国	1	2	1	4
3	キューバ	1	1	3	5
4	ベルギー	1	1	1	3
5	フランス	1		1	2
5	中国	1		1	2
7	北朝鮮	1			1
8	ポーランド		1		1
9	スペイン			2	2
9	オランダ			2	2
11	イタリア			1	1
11	ドイツ			1	1

日本が、オリンピック・世界選手権を通じて2回目の首位を得ている。また、日本と首位を分けた韓国、3位から5位のキューバ、ベルギー、フランスに今回不振であった欧州第1位のオランダ、選手層の厚い中国が現状の上位国と言えよう。また、アジア選手権の予選を経ずにワイルドカードで出場し、金メダルを獲得した北朝鮮のケー選手の活躍は目を見張るものがあった。これも女子柔道が世界各国に深く浸透、普及している一因と考えられる。これ以外の国では、日本と同じような強化体制を取ってきたイギリスが、ついにメダルを獲得できなかった。今後の日本の強化にも大きな教訓としなければならない。

以上６大会の強豪国のメダル獲得数の経過をもとにメダル獲得の条件を上げてみる。第一に、現在、世界のトップに位置する韓国、キューバ、フランス、オランダ、中国などは、ナショナルトレーニングセンターを保有し常時合宿体制を取っており、専任の強化コーチ制度があることである。第二に韓国、キューバ、中国は、オリンピックの４年以上前から強化選手を１～２名に絞り国際経験を積ませている。第三に、柔道の強化が日本中心の時代から欧州中心の時代へと変わりつつあることである。欧州では、１月から３月の期間に12回以上の国際大会が開催されている。女子柔道のみならず日本柔道の強化スタッフは、この３点を常に念頭において強化計画を立案、作成していかなければならない。日本が世界一の柔道の競技人口と優秀な指導者を有する国であることは疑いのない事実である。しかし、現状の強化を繰り返していては、現在の位置さえも維持できない日が来るであろう。これを打開する第一の方策として、アジアの強豪国である日本、韓国、中国が、欧州のように３週間続けて国際大会を開催し国際合宿を行うということを提言したい。

2　日本女子柔道選手の身体的特性

第４回全日本女子柔道体重別選手権大会（1981）から第18回大会（1995）までの15年間の大会のうち資料の抽出できた14大会の出場選手のべ1670名の平均年齢、平均身長を表したものが、表７である。

表７　全日本体重別出場者の年齢・身長

階級	平均年齢(歳)	ＳＤ	平均身長(cm)	ＳＤ
48kg級	17.95	2.85	153.21	3.56
52kg級	18.28	2.43	157.11	3.64
56kg級	18.74	2.85	157.99	3.42
61kg級	19.17	2.65	160.44	3.81
66kg級	18.70	2.34	162.94	4.13
72kg級	19.00	2.22	165.09	4.41
72超級	19.36	3.35	166.46	5.05
平均	18.74	2.67	160.46	4.00

これらの出場選手は、全て各地区の厳しい予選を勝ち抜くか、国際大会等で優秀な成績を残し推薦された選手であり、これらの数値は、日本女子柔道選手のトップクラスの平均的な特性を表していると言えよう。全選手の平均年齢は、18.7歳と比較的若く、平均身長は、160.5cm であった。階級別に見ると体重が重い階級になるにしたがって平均年齢も高くなり、48kgが最も若く17.9歳、72kg超級が19.4歳と最も高い年齢で、かなり大きな開きが見られた。階級別の平均身長でも体重が重い階級ほど身長も高くなる傾向が見られ、48kg級が最も低く153.2cm 、72kg超級が166.5cm と最も大きな値であった。

表８　階級別の各大会平均値（66kg級）

回数	平均年齢(歳)	ＳＤ	平均身長(cm)	ＳＤ
４回	17.20	3.54	161.00	7.74
６回	18.40	1.85	160.20	5.15
７回	18.21	1.97	162.07	4.31
８回	18.50	2.12	162.78	5.03
９回	17.46	2.30	164.84	3.41
10回	17.92	2.86	162.28	3.49
11回	18.14	1.64	162.85	2.84
12回	19.00	1.96	162.07	4.28
13回	18.36	2.51	163.30	4.52
14回	18.80	2.22	163.92	3.75
15回	18.96	2.58	163.64	4.04
16回	19.74	2.83	164.00	4.39
17回	19.80	2.14	163.92	3.03
18回	21.33	2.35	164.33	1.84
平均	18.70	2.34	162.94	4.13

表８は、階級毎の平均年齢、平均身長の年度推移を見たものである。表の66kg級と56kg級で僅かに平均身長が年度毎に大きくなっているが、その他の階級では大きな変化は見られなかった。このことより階級内での平均身長の変化はなく、競技力が上がるにしたがって体脂肪が減少し長身化が起こるという仮説は成り立たなかった。また、平均年齢では、表８からも分かるように16回大会から急に年齢が高くなっている。これは、他のどの階級にも見られる傾向である。今回の調査のみでは、確定的なことは言えないが、柔道では競技水準が上がれば高年齢化が進むものと思われる。その裏づけとして、第18回大会より出場選手を半

表9　階級別体力測定値（1992）

測定種目		48kg級 n=12	52kg級 n=15	56kg級 n=20	61kg級 n=27	66kg級 n=21	72kg級 n=21	72kg級 n=16	中学男子 n=33
背筋力（kg）		95.9	97.4	100.4	105.3	114.6	112.1	109.8	124.2
握力（kg）	右	29.7	32.0	34.5	35.2	38.6	37.7	39.3	38.2
	左	28.4	30.5	33.5	33.6	36.1	35.6	36.8	35.4
サイドステップ(回)		44.7	42.7	41.6	42.8	44.0	42.3	37.6	43.9
垂直跳び（cm）		40.7	39.0	42.5	42.7	42.5	40.1	37.4	56.7

数に絞り世界大会最終予選の形式を取ったが、同大会だけは48kg級（19.6歳）以外の、各階級とも20歳を越えており全階級の平均は20.9歳と各年度に比べ非常に高い値であった。これらのことより今回の調査と日本代表選手の数値を比較検討することが、今後の課題の一つと思われる。表9は、全日本柔道連盟科学研究部によって行われた1993年3月の全日本女子強化選手及びそれに準ずる選手（132名）の体力測定結果と1993年8月に同研究部によって行われた全国中学生柔道大会男子の体力測定結果（144名）から体力診断テストの項目であり、柔道の競技力に影響すると思われる握力（左右）・背筋力・垂直跳び・サイドステップの値を抜き出し比較したものである。比較対象は、女子と体型が似通っている55kg級としたが、背筋力だけは10kg以上中学生に及ばなかったものの他の値はほぼ同様の結果と言える。以上のことより、通説でいわれている女子選手の体力は、男子中学柔道選手とほぼ同等という考え方はある程度立証できたが、バランスの取れた体力という面から考えると背筋力などの体幹の強化が必要であろう。今回、明らかにした女子選手の身体的特性をもとに技術の指導、体力トレーニングの改善を図ることが可能であると考える。

3　国際柔道審判規定とスポーツコード

（1）柔道畳

国際柔道連盟試合審判規定には、試合場には、「畳またはそれに類するものを敷き」[13]「足ざわりが硬く、受け身の衝撃を和らげる性質のもの」[14]「すべらなくでこぼこしていない」[15]表面が清潔でよい状態であること」[16]としか記述していない。しかし、今回、アトランタオリンピックで使用したスウェン畳は、投げられて勢いがついたときには、1m 近くもすべる畳であった。「目はすりへってしまいその上にワックスをかけてあるのでよくすべる。知らない者のやることは恐ろしい」[17]と酷評されるような畳であった。この件に関しては、製造販売元である元世界選手権者のマイケル・スウェン氏も予期していなかった出来事であり、滑らないワックス等を準備し対応したが、全て新品を使用するオリンピックならではの出来事であった。今回のアトランタ大会で48kg級田村選手が、金メダルを獲得できなかった原因の一つは、この畳にある。体の小さい田村は、対戦相手にコントロールされ思い切って技を仕掛けることができなかった。今大会で使用された畳は、体の大きなパワーのある選手に味方したが、どんな状態でも勝ち抜くのが真のチャンピオンとも言える。

（2）柔道着

柔道着の大きさ、規格に関しては、10cmから15cm等の表現で厳格に規定してある。しかし、材質、厚み、襟の大きさなどに関しては、何の規制もなく「良質の綿、又はそれに類したもので作られた丈夫なもの（ほころびや破れがないもの）」[18]との表現しかしていない。この規定の不備は、日本で作られた審判規定を外国語に訳したため、門外不出・一子相伝などの武道精神や全国民が一つの言語で生活する国家独特の慣習が残ってしまったためと思われる。しかし、諸外国では、柔道着の襟の幅を大きくしたり厚くしたりしてして相手に持たせない工夫をしている選手も見られる。極端な例では、袖や胸にパットを入れたり、左右の袖の長さを変えるという不正も行われている。また、田村選手の決勝戦の対戦相手ケー選手は、国旗の付いていない右側の襟を前に出し（写真1）、結果的に右組みの田村選手は、なかなかケー選手の襟を握ることができなかった。この襟の前合わ

写真　1

せのように日本文化や武道では、文章や規則で規制せず、慣習として守っていることが多く残されている。しかし、これらの全てが柔道を習い競技する外国人に理解されているわけではない。今後、柔道着の規格に関しては、国際柔道連盟（ＩＪＦ）でもっと深く討議し、検討していく必要がある。

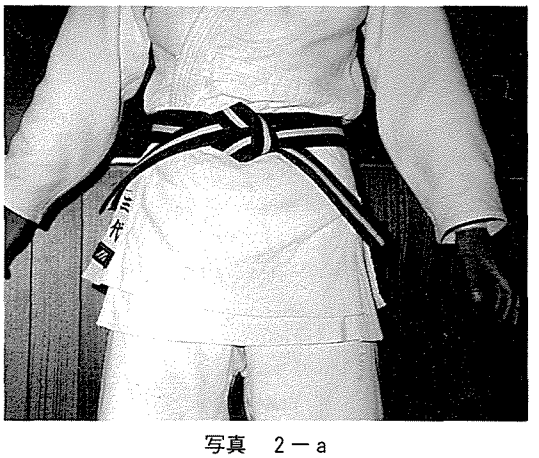

写真　2－a

（３）帯の締め方

写真２－ｂは、中国選手のほとんどが行っている帯の締め方である。規定では「４～５cm幅の帯が、腰の高さで上衣の上から正しく結んで締められる。そして上衣が緩すぎてはだけない程度の

写真　2－b

絞め方で、腰部を二回りして締めたときに、帯の結び目から両端までが20～30cm程度の長さのもの」[19]としか表現していない。この規定から見ると中国選手の帯の締め方は違反とは言えず、試合中に何度も帯が解けて試合が中断しても罰則を与えることはできない。写真２－ａのように正しく結ぶ規定を盛り込む以外に方策はないと考える。これは、柔道着と同様に帯は、ユニフォームではなく、野球のバットやテニスのラケットのように競技に直接影響する用具であるという理解の不足から起こってきた問題である。

（４）一本の定義

写真３は、アトランタオリンピック最終日の60kg級決勝戦で日本の野村選手が、イタリアのジオビナッツォに一本勝ちした瞬間をとらえた連続写真である。国際規定では、投げ技における一本の定義を「試合者の一方が、相手を制しながら背を大きく畳につくように、強さと早さをもって投げたとき」としている。講道館の規定では、「技を掛けるか、又は相手の技をはずして、相当の勢い、あるいははずみで、だいたい仰向けに倒したとき」を一本の定義としている。両規定に高さという言葉は見られないが、我々日本人の理解では、勢い、はずみを高さと理解して、高い位置から相手を投げることを一本の条件としている。しかし、現在の国際規定では、勢いよく転がせば一本となり、相手を転がす技が盛んに研究されている。相手を「投げる」「倒す」「転がす」という言葉の定

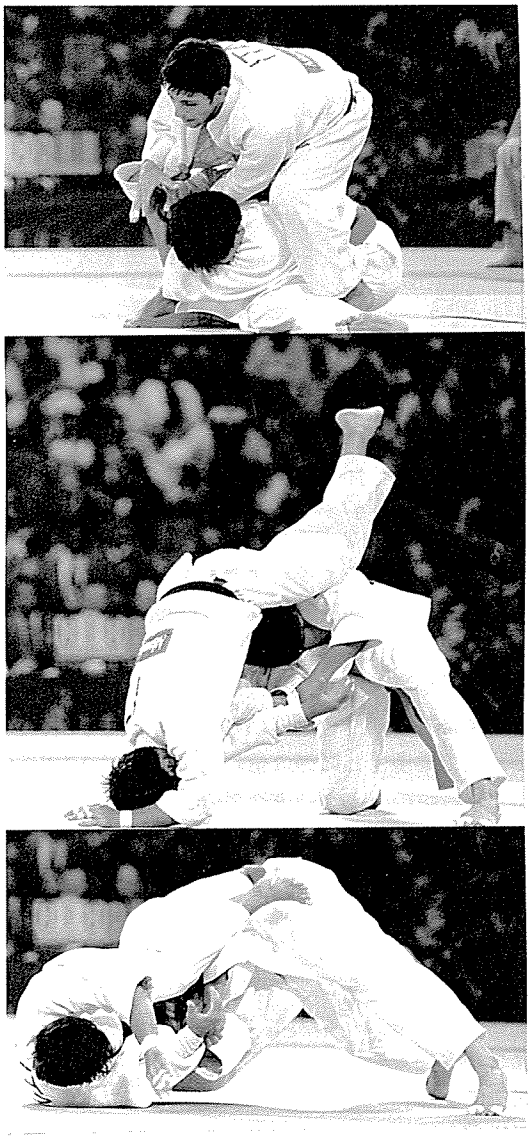

写真　3

義を再度検討する必要があると考える。また、国際柔道連盟では、一本を軽くし一本勝ちを多くしようという動きも見られる。野村選手の背負い投げは、どの位置から見ても「背を大きく畳についた」ようには見えない。このように一本の定義の問題と審判の規定運用の問題から投げ技の評価が軽くなってしまったものと思われる。

（５）カラー柔道着

写真４－ａ・ｂ・ｃ・ｄは、投げ技、固め技の

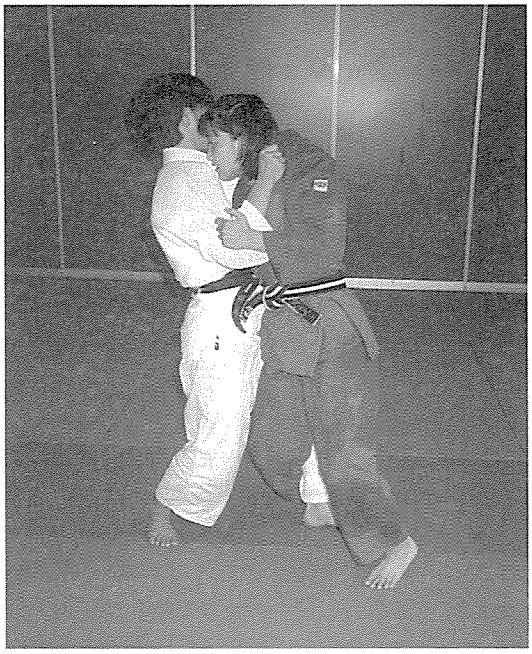

写真　４－ａ

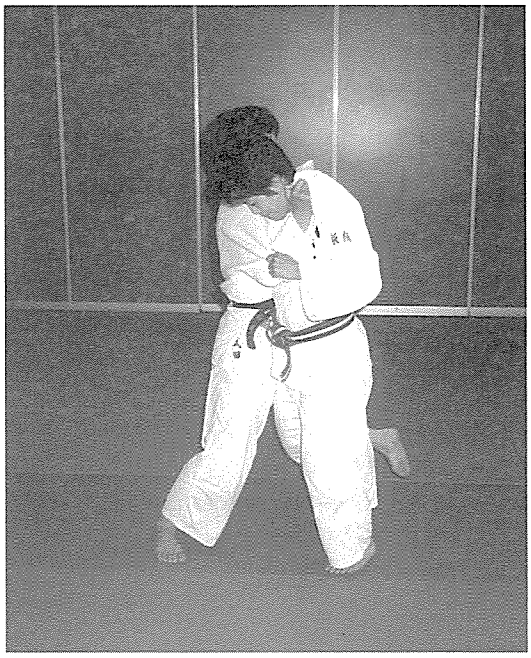

写真　４－ｂ

同じ技を青のカラー柔道着と白の柔道着、白の柔道着と白の柔道着で施技したものである。白黒写真のため見ずらい部分もあるが、技の施し方、両者の位置関係などは、カラー柔道着の方が分かり

写真　4－c

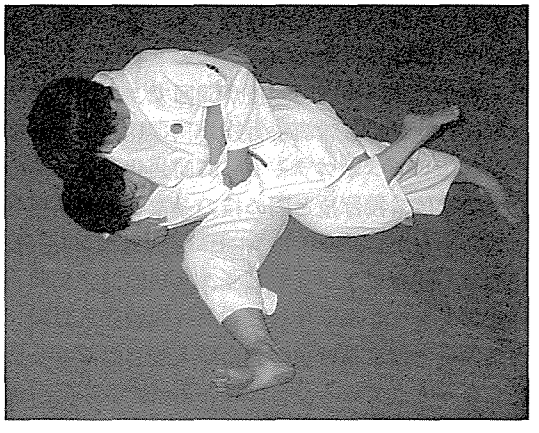

写真　4－d

やすい。また、試合場から離れた位置で観戦する観客にとっては、カラー柔道着の方が選手を識別しやすい。国際柔道連盟は、カラー柔道着の導入について「テレビ受けする（わかりやすい）」「観客のとっても見やすい」「審判の誤審が少なくなる」[20]などと説明している。これに対して日本は「白い柔道着に黒帯というのは100年を越す伝統があり、その伝統イメージを打ち破っての発展はない」「日本では白は潔白を表し、教育的な面からも白がふさわしい」「経済的負担が大きい」「試合用・練習用の４着の柔道着（約８kg）を運ぶのは選手にとって負担」[21]などの理由をあげ反対している。カラー柔道着の問題については、1986年マーストリヒトの世界選手権から討議し、３回の導入提案が否決されてきた経緯がある。しかし、否決の主な理由は、経済的な問題で柔道着の色によって柔道の哲学や理念が変わるのかという核心部分の討議はされていない。スポーツウェアのカラー化は時代の趨勢でありカラー柔道着の善し悪しは別として、日本武道の理念や伝統的な考え方を諸外国の柔道家に再認識してもらう良い機会である。カラー柔道着の問題は1996年10月のＩＪＦ理事会で再討議されることになっているが、日本の積極的な研究、働きかけを期待したい。

4　オリンピック・世界大会の競技内容

女子柔道の競技内容の変化は、男子の競技に追随する形で発展しており、男子の技術が変化して、その影響を受けて女子の技術、競技内容が変わっていく場合が多い。これは女子選手の指導が、女性の柔道指導者のみで行われるのではなく、むしろ男性の指導者が女子選手を指導する場合が多いことからも当然のことと言えるであろう。このような観点から男子の大会の競技内容を分析すれば、今後、どのような方向へ女子柔道の技術が進んでいくかを推察ができる。そのため、今回の競技内容の分析は、長い歴史を有する男子柔道の世界大会に焦点を絞った。今回対象としたのは、1981年度マーストリヒト、1983年度モスクワ・1989年度ベオグラード・1991年度バルセロナの世界選手権及び1992年度バルセロナ・1996年度アトランタのオリンピック大会である。[20]

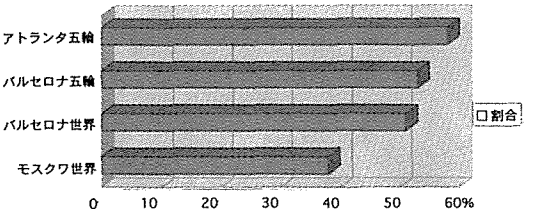

図１　世界大会における１本勝の割合

図１は、各種世界大会のおける一本勝ちの割合を表したものである。1983年モスクワ世界選手権では、一本勝ちが233 試合中90試合で、その割合は38％であったものが、1991年バルセロナ世界選手権（124 回／239 試合）で51％、1992年バルセロナオリンピック（188／356 ）で53％、1996年

アトランタオリンピック（185 ／318 ）で58％と一本勝ちの割合が増え続けている。野瀬の調査[22]では、国内大会の一本勝ちの割合は、30％前後であり、今回の数値はそれに比べ非常に高い値であった。この数値の差は、国際規定が積極的に攻撃しない選手に厳格に罰則を与え、偽装攻撃にも厳しい判断をくだすことや国際審判がポイントをリードした試合者に特に厳しく罰則を与えるなどの理由であると考えられる。しかし、アトランタ大会では、大陸別の予選が行われ参加者のレベルが大きく上がっているにもかかわらず60％近い一本勝ちが見られた。このことは、前段でも述べたように一本の基準が甘くなり「技有」「有効」程度でも一本と宣告したものも多くあったためと推察できる。

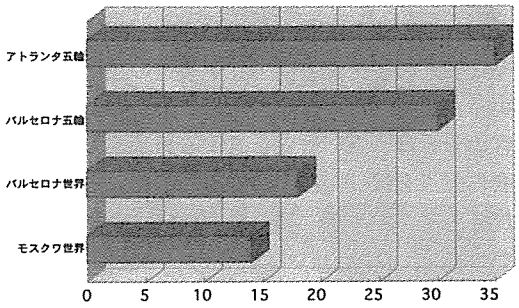

図２　投技における決まり技の種類

図２は、図１と同様の４大会の投げ技における決まり技の種類を表したものである。1983年モスクワでは、14種類しかなかった決まり技が、1991年バルセロナでは18種類、1992年バルセロナオリンピックでは30種類、1996年アトランタオリンピックでは35種類と増加し続け、多様な投げ技が使われるようになった。これは、国際柔道の発展という面では、大変喜ばしいことである。特に、最近の大会では、従来から決まり技としての頻度の高い内股、背負投、払腰、大内刈、大外刈などの技のみでなく、谷落、巴投などの捨て身技や袖釣込腰、新しい朽木倒、掬投、なども多く用いられている。また、今回のオリンピックから国際柔道連盟に袖釣込腰、一本背負投、裏固、浮固などの新しい技の名称が加わったことが影響している可能性も否定できない。

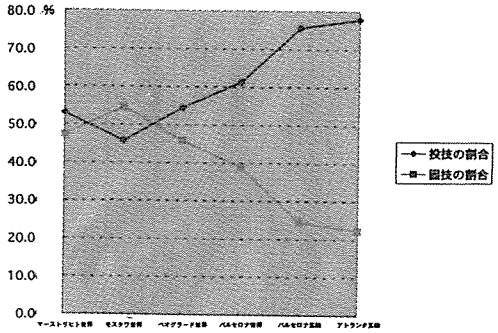

図３　各大会の投技と固技の割合

図３は、投げ技と固め技の一本勝ち数の割合を表している。1981年マーストリヒトでは、投げ技の一本勝ちが66回、固め技が59回で、1983年モスクワ（41回／49回）で固め技の一本勝ちが多くなったが、1989年ベオグラード（57回／48回）までの３大会では、投げ技と固め技の一本勝ちが拮抗していた。しかし、1991年バルセロナ（76回／48回）、1992年バルセロナオリンピック（142 回／46回）、1996年アトランタオリンピック（144 回／41回）の３大会では、投げ技の割合が大会を経るごとに高くなってきている。このことより国際柔道では、年々投げ技指向が強くなっていることが伺える。この理由は、固め技では、いくら攻勢をとっても判定の材料にならないことや固め技に移行した時

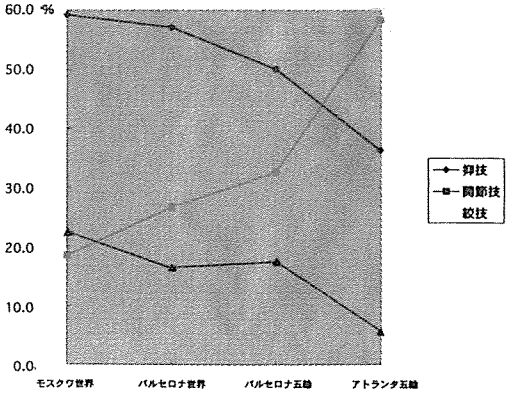

図４　大会別の固技の決まり技の変化

に「マテ」をかけるなど寝姿勢の時間が短くなっていることが上げられる。

図4は、世界大会の固め技の決まり技を抑え技、絞め技、関節技に分類したものである。1983年モスクワ世界選手権では、抑え技が29回、絞め技11回、関節技9回の順であったのが、1991年バルセロナの世界選手権から関節技が増加し、アトランタオリンピックでは関節技が最も多く21回、抑え技18回、絞め技2回となった。近年の大会で関節技が優位となった理由は、瞬間的に相手を制することができ、現在の審判規定に適合しているからであると考えられる。また、図3の固め技の一本勝ちの割合が減少している原因として抑え技、絞め技の減少が明らかになった。

5　欧州勢の組み方の変化と新しい技

アトランタオリンピック日本柔道選手団は、1996年5月のオランダのアムステルダム市に於いて開催された第45回欧州選手権大会の視察を行った。欧州選手権の視察は、毎年行われているが、今回の視察で強く感じたことは、柔道試合が非常に激しくなってきているということである。その裏づけの一つとして、女子8階級の決勝戦のうち2試合で片方の選手が負傷し途中で試合が継続できなくなり棄権負けとなっている。野瀬は、大会視察報告書に「試合の攻防が激しくなってきている」「組み負けして少しでも腰を引いたり、膝をついたりすると指導を受ける」「前襟をもって試合をする選手は少なく、ほとんどの選手は背中を持つ組み手である」「寝技の攻防では、動きが止まるとすぐ待てになる」「ズボンを持って投げる朽木倒、掬投が多く見られた」「欧州選手の組み方が大きく変わった」[23]などの報告をしている。また、アトランタオリンピック女子柔道の展望として「キューバが群を抜き、次いで韓国、それに続くのが欧州の強豪国オランダ、ベルギー、フランス、ドイツなどである。これらの国とアジアの日本、中国が、アトランタで熾烈なメダル争いを繰り広げることになるであろう」[24]とも述べている。アトランタオリンピックに於いては、日本・韓国・ベルギー・フランス・中国・北朝鮮・スペイン・オランダが、金または複数のメダルを獲得し、アジアと欧州の力は拮抗しているように思われる。しかし、アジアの柔道は、日本の指導者が、指導した時代が長く続いたため日本柔道の影響が大きく、基本に忠実な柔道であるが、新しい技術の開発はあまり行っていない。

写真5

写真6

写真7

例えば、アトランタ大会の86kg級代表の吉田選手の戦いぶりをオランダ選手は「吉田の試合は、5歳の子供と同じで組み方や技の掛け方が全て読める」（日刊スポーツ、7月24日）と講評しており、欧州勢は、それだけ新しい技の開発や新しい組み方の研究に熱心であると言えよう。

写真5から写真7は、欧州選手権決勝の各級の組み方、施技であり、写真5は、現在の欧州選手の一般的な組み方と姿勢である。この写真のように互いに腰を深く曲げ、足を取られたり投げられたりしないようにディフェンスを固める。注目すべきことは、互いに襟を持ち合わないことである。柔道の基本の姿勢、組み方は、「互いに自然体で相対し、一方の手で相手の袖を取り、他方の手で相手の襟を取って組み合う」[25]とある。欧州選手も長い間、この基本の組み方で競技を行ってきた。しかし、組み手のディフェンスの技術が発達し、襟を持たれたら切り離すという技術が、日本から海外に普及していった。この結果、襟を握った手を切り離されるときに爪をはがしたり、指の靭帯を損傷するという障害が多く起こるようになった。上肢の長い欧州選手は、これらの障害を防止し、しっかりと組めるという意図から背中を持つ技術を開発したのだと推察する。写真6・写真7は、それぞれ男女の決勝で攻撃に移り施技をしているところである。背中を持つ組み方のため両手を自由に動かすことができるが、襟を持っていないので相手を崩すことができず、このように接近戦となる。写真6は、白の選手が足取りの大内刈または小外刈を掛けようとしているところで、写真7は、白の女子選手が、掬投を施し「技有」を取る瞬間である。これらの技のほか、写真5からの施技で可能な投げ技は、掬投に分類されるレスリングの飛行機投、襟を持つ手を離して掛ける新しい朽木倒などである。写真5の姿勢からは、大きく相手を投げることは不可能であるため相手を転がす、倒すなどの技術が盛んに研究されるようになったと考えられる。このような新しい技術を研究するには、現象としての選手の技術のみではなく、その技術がどのような観点で何の影響を受けて出現してきたかを深く検討していく必要がある。

6　ナショナルトレーニングセンター

ナショナルスポーツトレーニングセンターとは、国家の代表選手が常時合宿体制を取り競技力を向上させる目的で設置されていたり、それぞれの競技団体が、外国のチームを安価で受入れ合同合宿ができる施設であったり、高地トレーニングを主な目的とする施設であったり様々である。例えば、韓国テヌンのトレーニングセンター（写真8）は、各種目のナショナルチームの選手が合同で居住し、朝のトレーニングは全種目の選手が合同でトレーニングを行うスタイルを取っており、テヌン選手村と呼ばれ管理の責任者は村長と呼ばれている。いずれにしてもナショナルトレーニングセンターの明確な定義はない。しかし、あえてナショナルトレーニングセンターの概念を定義するならば、宿泊施設や食堂があり、各種目の練習場が設置され、体力トレーニング及び体力測定の機器が完備し、スポーツドクターの診察室や理学療法師によるリハビリが出来る施設があることが条件となろう。ドイツでは、柔道のナショナルチームが常時合宿できる施設が、国内で7ヶ所に設置されている。また、アメリカのコロラドスプリングス市には、ＵＳトレーニングセンター（写真9）が設置されており、各種目のナショナルチームに指名されれば、国から食住の援助を受けながら学校に通学することができる。この施設も何度か視察したが、パスカードを持っていれば、ほとんど24時間自由に食事ができ、宿泊施設も大学の宿舎と変わらない。また、体力科学やそれぞれの種目の技術を分析できる研究室も十分に設置されている。また、1700m 程度の高地に設置されているため高所トレーニングの準備にもなる施設である。フランスの国立体育研究所（写真10）は、通称ＩＮＳＥＰと呼ばれ、パリの中心地に近いバンセーヌの森の中に設置されている。さきに上げたナショナルトレーニングセンターの条件は、十分に完備しており、この施設で生活して高校、大学に通う選手、施設の近くに宿舎を借りて施設で練習をする選手など様々である。特筆すべきことは、フランスはこの施設にアルジェリア・チュニジア・モロッコなどの優秀な選手も合宿のみでなく留学という形で受け入れている。この二つの施設の写真、資

料等に関しては、紙面の都合で省略した。図5・写真11は、オランダ・アーヘン市に設置されているパーペンダルナショナルスポーツセンターの見取図である。施設の敷地面積は、埼玉大学（305.901㎡）の6～6.5倍の広大な土地を有し、パラシュートの訓練すら出来る規模の施設である。周辺は森林に囲まれ施設の周辺を散歩するときは、森林浴を楽しむ趣がある。オランダ柔道連盟では、毎年7月に約20ヶ国の男女柔道選手を集め合宿を実施する。現在では、パーペンダル合宿として欧州・アジア・アメリカ大陸の国々でも恒例となった合宿である。このような施設が、日本にないことが、アトランタオリンピック後のＪＯＣ反省会議で大きな問題となった。日本では、地元開催の長野冬季オリンピックの開催が迫っているが、ナショナルトレーニングセンターの設置は、長野オリンピック後のＪＯＣの最大の課題として早期実現を目ざさなければ、2000年のシドニーオリンピック及びその後の大会では、さらにメダル数を減らすこととなるであろう。今後諸外国のトレーニングセンターの設置状況をさらに視察調査し、センターの設置に向けて検討を進めていきたい。

Ⅳ　まとめ

本研究の目的は、柔道競技における各国の強化のシステムと運営・強化のための施設・医科学サポートのシステム・大会の開催と運営・選手を取り巻く環境・コーチの育成法・選手、コーチの競技に対する価値観・選手のプロフィール・国際柔道審判規定の問題点・柔道着等のスポーツコードの問題などを取り上げ、継続的に柔道の国際化と競技力向上の問題を検討していくことにある。今回は、第一報としアトランタオリンピック女子柔道競技に焦点を当て、日本代表の身体特性・国際柔道審判規定とスポーツコード・世界大会の競技内容の分析・各国の柔道のスタイル・ナショナルトレーニングセンターなどの問題を取り上げた。主な研究成果は、以下の通りである。

（1）世界女子柔道の強豪国は、日本・韓国・キューバ・ベルギー・フランス・中国・オランダなどであり、強化のシステムが充実している国であった。また、過去にメダルを多く獲得したオーストラリア、イギリス、アメリカなどは近年メダルの獲得ができなくなっていた。

（2）日本女子柔道選手の身体的特性では、日本のトップ選手の平均年齢は、18.4歳で、平均身長は、160.5cm であった。しかし、階級が重くなるに従って、平均年齢、平均身長も高くなる傾向が見られた。体力では、女子選手は、中学生男子の全国大会出場者と同程度であるが、背筋力の強化など体幹の強化の必要性が示唆された。

（3）国際柔道審判規定とスポーツコードの問題では、国際規定と日本の規定で一本の定義が大きく異なり、国際規定の一本が変質している。また、柔道畳・柔道着・帯の締め方などで規定に不備な点が多く見られた。また、カラー柔道着の導入について日本は、武道的理念からの積極的な研究が必要である。

（4）オリンピック・世界大会の競技内容では、一本勝ちが、増え続けており、その割合で見ると日本の国内大会の約2倍である。しかし、固め技の一本勝ちは減少しており、抑え技・締め技は特に少なくなっている。これらは、国際規定の運用の影響であり、投げ技の一本の判定が軽くなり、固め技の「マテ」が早くなったためである。

（5）欧州勢の組み方の変化と新しい技の検討では、欧州の柔道選手に柔道着の背中を持つ独特の組み方と肩車・掬投・大内刈・朽木倒などの新しい技が見られた。これは、一本の定義が、変容してきていることにより技術が変わったためである。

（6）ナショナルトレーニングセンターを持っている国がオリンピックで成功を収めている。オランダ、韓国、フランスなどのトレーニングセンターは、日本の総合大学の約6倍の敷地と施設を有している。今後、日本のスポーツ強化のためには、国家の援助によるナショナルトレイニングセンターの設置が必要である。

写真 8

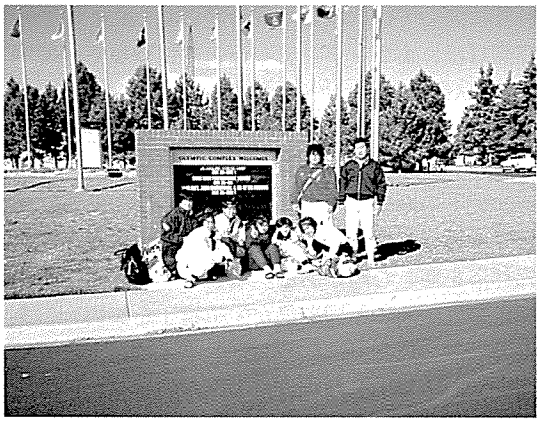

写真 9

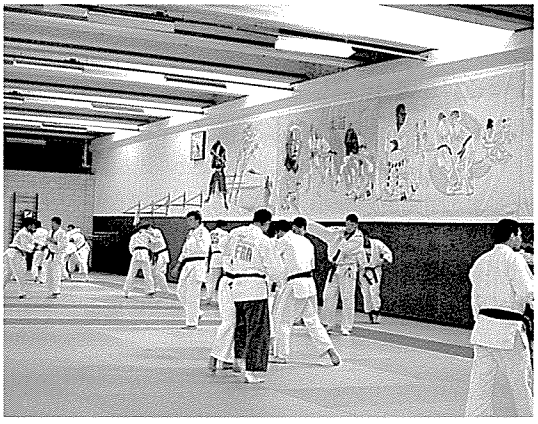

写真 10

写真 11

1. Hoofdingang
2. Hoofdkantoor NOC*NSF
3a. Parkeerplaats
3b. Parkeerplaats
4. Hoofdgebouw/Receptie
5. Congres- evenementenhal
6. Sporthotels I & II
7. Hotel III
8. Sporthal/Fitnessruimte/ Boksring/Klimwand
9. Zwembad en instructie-bassin
10. Energiegebouw
11. Tennisbanen/oefenmuur
12. Quad-terrein
13. Survivalbos
14. Heel verhard veld
15. Honkbalaccommodatie
16. Kunstgrasveld (met verlichting)
17. Atletiekaccommodatie (met verlichting)
18. Grasvelden A t/m H
19a. Speelveld
19b. Speelveld
20. Oefenbaan voor kogelslingeren
21. Sauna
22. Jeu de boulesbaan
23. Midgetgolfbaan
24. Clubhuis EGC
25. Driving-range voor golf
26. 18-Holes golfcourse
27. Conditietrainingsbaan
28. Trimbaan
29. Kampeercentrum De Slenk
30. Blaashal
31. Speelweiden
32. Proefstation NOC*NSF sector Sport Accommodaties
33. Onderhoudsdienst NSC Papendal
34. Gelderse Sport Federatie/KNLTB district Gelderland

Een gedeelte van het wegennet (2 km) kan dienst doen als wielercircuit.

図5　オランダのナショナルスポーツトレーニングセンター

引用・参考文献

1）東龍太郎（1962)、オリンピック、わせだ書房、72頁
2）同上書、73頁
3）財団法人講道館（1996)、柔道９月号、43頁
4）岡部平太（1957)、スポーツと禅の話不昧堂出版、50-80 頁
5）文部省（1989)、中学校指導書保健体育編、43頁
6）財団法人講道館（1996)、柔道９月号、24頁
7）同上書、26頁
8）同上書、41頁
9）同上書、58頁
10）財団法人講道館（1996)、柔道９月号、43頁
11）柳沢久・山口香著（1992)、女子柔道大修館書店、９頁
12）同上書、10頁
13）財団法人全日本柔道連盟（199、国際柔道連盟試合審判規定、４頁
14）同上書、５頁
15）同上書、６頁
16）同上書、23頁
17）財団法人講道館（1996)、柔道９月号、58頁
18）財団法人全日本柔道連盟（199、国際柔道連盟試合審判規定、12頁
19）同上書、14頁
20）ベースボールマガジン社（1996)、近代柔道３月号、48-50 頁
21）ベースボールマガジン社（1996)、近代柔道８月号、57-61 頁
22）野瀬清喜・辻原謙太郎・木村昌彦（1989)、柔道競技における攻撃動作の競技分析的研究、埼玉大学紀要教育学部（教育科学第38巻第１号117-127 頁
23）財団法人講道館（1996)、柔道７月号、74頁
24）同上書、75頁
25）飯田穎男（1988)、柔道研究とその課題、武道学研究20－３、7-12頁
26）馬立龍雄（1963)、オリンピックーそのすべてー、報知新聞社
27）川本信正・鈴木良徳編（1952)、オリンピック史、日本出版協同株式会社
28）斎藤喜欠能、高橋健夫、生田清衛門ほか13名（1996)、新編新しい保健体育（中学校全)、東京書籍
29）財団法人講道館（1995)、講道館柔道試合審判規定
30）財団法人講道館（1996)、柔道８月号
31）財団法人日本武道館（1996)、月刊武道１月号
32）高妻容一（1989)、スポーツ心理学の武道への応用、武道学研究22－１56-68 頁
33）藤堂良明（1993)、「武道」としての学校柔道のあり方について、武道学研究26－２、7-12頁
34）醍醐敏郎・佐藤宣践監修（1986)、柔道／戦後柔道その栄光と変遷、ベースボールマガジン社
35）堀田登（1967)、近代スポーツ発展の系譜、山文社
36）ベースボールマガジン社（1993)、近代柔道１月号
37）ベースボールマガジン社（1995)、‘95世界選手権大会決算号（近代柔道10月号増刊）
38）文部省（1993)、学校体育実技指導資料、第２集柔道指導の手引き（改訂版）

（1996年10月１日提出）
（1996年10月11日受理）

Internationalization of Judo and future assignment in Japanese Judo (First report)

—Centering around the substance and point at issue of female Judo competition at the Atlanta Olympic Games—

Seiki Nose

The target of this reserch is to study and examine each country's present circumstances in Judo, such as training systems and management, training facilities, medical support systems, organization and management of tournaments, environment for athletes, training methods for coaches, philosophies toward competition itself for athletes and coaches, athlete profiles the matter of IJF contest rules, the point at issue of IJF sporting code concerned primarily about the Judo uniform.

I intend to pick up some dilemmas from each subject above and also continuously study the matters of internationalization of Judo and the improvement of athlete abilities.

Initially, my first report will be centralized on women's Judo competitions held at Atlanta during the Olympic Games to study physical peculiarity of Japanese athletes, IJF contest rules and sporting codes, analyze substance of competition, and difference in styles of their Judo in each country. Lastly, highlighting on the establishing a National Training Center in Japan.